

日本民家園 花便り7月号(2)

～暮らしと植物～



ヤマユリ 山百合 鈴木家ほか

縄文時代からもっぱら食用(ユリ根)として栽培されてきたユリ、幕末にはシーボルトによって観賞用として欧米に紹介され、外貨を稼ぐ重要な輸出品となりました。カサブランカなどを作り出した交配親です。



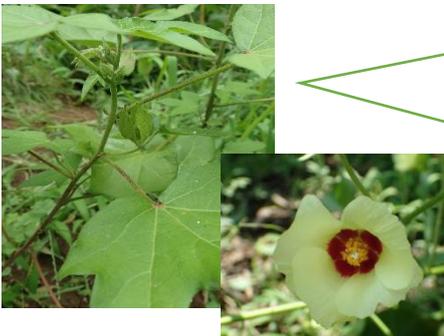
トクサ 砥草 三澤家

「砥ぐことができる草」が名前の由来。ザラザラした茎は目の細かい紙やすりのよう。繊細な工芸品の仕上げに使用されてきました。節にある黒いギザギザが葉(写真右下)。



オニユリ 鬼百合 佐々木家

鱗茎(ユリ根)はヤマユリと同様に食用で薬用(生薬：百合(ひゃくごう))、薬食同源ですね。種子はできず、鱗茎と珠芽(ムカゴ)で増殖します。オニユリの‘ムカゴ飯’、ホクホクでちょっと苦味がありました(写真右下)。



ワタ 綿 江向家畑

インドではインダス文明(紀元前 3000 年頃)から栽培が行われていました。日本では江戸時代に栽培が急速に拡大し、それに伴い、‘藍’の栽培や‘干鰯’の肥料製造が盛んになりました。



クズ 葛 トンネル上ほか

根は和菓子の材料になる葛粉や生薬の葛根(かっこん)、蔓は丈夫な繊維の葛布、葉は家畜の飼料。かつては有用植物の代表格でしたが、現在は厄介者。時代の流れを感じさせる植物です。